



kaminorippo.org

付録7c: マルコ 10:11-12 と姦淫における偽りの平等

このページは、神が受け入れる結びつきに関する連載の一部で、次の順序に従っています:

1. [付録7a: 処女、やもめ、離縁された女: 神が受け入れる結びつき](#)
2. [付録7b: 離縁状 — 真実と神話](#)
3. [付録7c: マルコ 10:11-12 と姦淫における偽りの平等](#) (現在のページ)
4. [付録7d: 質問と回答 — 処女、やもめ、離縁された女](#)

離婚教義におけるマルコ 10 の意味

本稿は、マルコ 10:11-12 を、イエスが姦淫において男女の平等を教えた、あるいはユダヤの文脈で女性が離婚を開始できると教えた、とする誤った解釈を退けます。

質問: マルコ 10:11-12 は、イエスが神の離婚に関する律法を変えた証拠ですか？

回答: 証拠ではありません——まったくそうではありません。マルコ 10:11-12 でイエスが(1)女性も姦淫の被害者になりうる、(2)女性も夫を離縁できる、と教えたとする考えに対する最大の反証は、そのような理解がこの主題に関する聖書全体の教えと矛盾しているという事実です。

神学的釈義における本質的原則は、単一の聖句に基づいて教理を築くべきではない、ということです。他の靈感を受けた書と著者が何を語っているかも含め、聖書の全体的文脈を考慮する必要があります。これは、聖書の教理的な一貫性を守り、孤立した、あるいは歪められた解釈を防ぐための基本原則です。

言い換えれば、マルコのこの一句から引き出される二つの誤解はあまりにも重大であり、ここでイエスが族長以来神がこの主題について教えてこられたすべてを変えた、と主張することはできません。

もしこれが本当にメシアからの新しい指示であったなら、他所にも——より明確に——現れているはずです。とりわけ、離婚の主題に触れた山上の説教には、次のような言葉があったでしょう。「昔の人々にこう言われたのをあなたがたは聞いた。『男は妻を離れて、別の処女ややもめをめとることができる。』しかし、わたしはあなたがたに言う。もし彼が妻を離れて別の女と結びつくなら、最初の妻に対して姦淫を犯すのだ……」

しかし、当然ながら、そのような言葉は存在しません。

マルコ 10:11-12 の釈義

マルコ 10 は強く文脈依存です。この箇所が書かれた時代は、離婚が最小限の規則で行われ、男女双方から開始されうる時代でした——モーセやサムエルの時代とは大いに異なります。バプテスマのヨハネが投獄された理由を考えるだけで十分です。ここは族長時代ではなく、ヘロデの治めるパレスチナでした。

当時、ユダヤ人は結婚、外見、女性の権威などの分野でも、ギリシア・ローマ社会の慣習から大きな影響を受けていました。

あらゆる理由による離婚の教義

ラビ・ヒレルが教えた「どんな理由でも離婚できる」という教義は、より魅力的で若い、あるいは裕福な家の女性と結婚したいと望む、墮落した人間にありがちな欲求を持つユダヤ人男性に社会的圧力が加わった結果として生じたものです。

この考え方は残念ながら今日でも存続しており、教会の内部でさえ、男が妻を離れて他の女と結びつくということが起きています——しかも、その女はたいていすでに離婚した女です。

三つの中核的な言語ポイント

マルコ 10:11 の一節には、本文の真意を明らかにする三つの鍵語があります。

και λεγει αυτοις Ος εαν απολυση την **γυναικα** αυτου και γαμηση αλλην μοιχαται **ἐπ’ αὐτήν**

γυναικα (gynaika)

γυναίκα は γυνή の対格単数形であり、マルコ 10:11 のような婚姻文脈では、一般的な「女性」ではなく、特に既婚女性を指します。これにより、イエスの答えが、処女ややもめとの新たな正当な結びつきではなく、むしろ結婚契約の違反に焦点を当てていることがわかります。

ἐπ' (epí)

ἐπí は通常「～の上に」「～と共に」「～の上で」「～の中に」を意味する前置詞です。この節で「～に対して」と訳す翻訳もありますが、言語学的・神学的文脈を踏まえると、それは最も一般的な語感ではありません。

世界で最も広く用いられている聖書である NIV (*New International Version*) でも、ἐπí の 832 回の用例のうち、「～に対して」と訳されるのはわずか 35 回であり、残りでは「上に／その上／中に／共に」といった意味が表されています。

αὐτήν (autēn)

αὐτήν は代名詞 αὐτός の女性・単数・対格形です。マルコ 10:11 のコイネー語文法では、「αὐτήν」(彼女)という語が、イエスがどの女性を指しているのかを特定しません。

文法上の曖昧さが生じるのは、先行詞が二つ考えられるからです。

- τὴν γυναῖκα αὐτοῦ (「彼の妻」)——第一の女
- ἄλλην (「別の[女]」)——第二の女

いずれも女性・単数・対格で、しかも同じ文構造の中に現れるため、「αὐτήν」の指示対象は文法上あいまいです。

文脈に即した翻訳

原文に読まれる内容を踏まえると、歴史・言語・教理の文脈に最も整合する訳は次のようになります。

「自分の妻(γυναῖκα)を去って、別の女——すなわち別の γυναῖκα、すでに誰かの妻である別の女——をめとる者は、その女と(ἐπí)姦淫を犯す。」

要点は明らかなです。正当な妻を去り、別の男の妻であった女(ゆえに別の女ではない)と結びつく男は、この新しい女と姦淫を犯す——すでに別の男に魂が結び合わされている女と結びつくのです。

動詞「apolýō」の真の意味

マルコ 10:12 が、女性が法的に離婚を開始でき、ゆえに別の男と結婚できる、という聖書的根拠を与える、という考えは、原初の聖書的文脈に根拠のない時代錯誤的解釈です。

第一に、同じ節の中でイエスは、もし女が別の男と結びつくなら、二人は姦淫を犯す、と結んでいます——これはまさにマタイ 5:32 で語られているとおりです。言語学的には、多くの聖書で「離婚する」と訳される動詞 ἀπολύω (apolýō) の本義に誤解があります。

「離婚」とする訳は近代の慣習を反映したもので、聖書時代において ἀπολύω は単に解き放つ、去らせる、自由にする、送り出すなど、物理的・関係的な行為を意味しました。聖書的用法の ἀπολύω 自体には法的な含意はなく、形式的な法手続きを暗示しない、分離を表す動詞です。

言い換えれば、マルコ 10:12 は単に、女が最初の夫がまだ生きているあいだに夫を離れて別の男と結びつければ、彼女は姦淫を犯す、と述べているにすぎません——それは法的問題ゆえではなく、なお有効な契約を破ることになるからです。

結論

マルコ 10:11-12 の正しい読みは、処女と既婚女性を区別するという聖書全体の一貫性を保ち、単一の、しかも誤訳に基づく一句から新しい教理を持ち込むことを避けるものです。